

令和2年7月17日

資料へのお問合せ先

奈良市教育委員会 教育部

文化財課 史料保存館

電話 0742-27-0169

## 史料保存館 企画展示

# 神仏への祈りー奈良町・周辺地域の信仰資料ー

史料保存館では、保管史料を活用した奈良町の歴史情報発信に努めています。今回の展示では、奈良町や周辺地域で受け継がれてきた伝統行事のひとつ、「講」とよばれる信仰行事の中で、町や村の人々によって祭られてきた講関係の資料の中から、人々が実際に行事で祭ってきた神仏を表わす絵画や墨蹟などを中心に、奈良町と周辺地域の信仰を紹介します。

### 1. 開催概要

会場	史料保存館 展示室（奈良市脇戸町1-1）
会期	令和2年7月21日（火）～9月27日（日）
開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）
休館日	月曜日・祝日の翌平日（祝日は開館） 8月11日（火）・9月23日（水）休館
入館料	無料

**展示解説** 史料保存館で、館員による展示解説を2回行います。約30分の予定。申し込みは不要です。

- [日時] ①8月29日（土）午後1時半～  
②9月8日（火）午後1時半～

※新型コロナウイルス感染症予防のため、予定を変更する場合があります。



史料保存館・奈良町にぎわいの家の場所

### 2. 展示の見どころ

今回は、奈良町や周辺地域での講の行事で祭ってきた神仏を表わす絵画や墨蹟として、

- (1) 地藏菩薩立像 (2) 春日宮曼荼羅 (3) 三社託宣 (4) 月輪図 (5) 富士浅間菩薩名号 (6) 阿弥陀三尊来迎図 (7) 涅槃図を紹介します。

(1) **地藏菩薩立像** 今も広く奈良町や周辺地域で行われている地藏会（地藏盆）の本尊で、石仏の地藏を祭るところも多くあります。奈良の人たちにもっと親しまれているお像かもしれません。

(2) **春日宮曼荼羅** (3) **三社託宣** 春日信仰を表すものとして祭られることが多いと思われます。奈良町や周辺地域の代表的な伝統行事である春日講の行事で掲げられました。三社託宣は、墨蹟と春日大明神、天照大神、八幡大菩薩の示現した姿を描いた絵像

です。天照大神は兩童子の姿で、庶民の間でも広く信仰されてきた伊勢信仰の本尊としても祭られてきました。

(4) 月輪図は、日待講にかかわる図とも考えられますが、どのように祭られていたのかははっきりと伝えられていません。

(5) 富士浅間菩薩名号を中心に役行者、理源大師像など5点を並べる形態になっている図です。この瓦町の資料は、富士山への信仰と、奈良の人々にとって身近な存在の靈山大峰山の信仰に関わるもので、大峰講と富士講が一体となっている珍しいものです。

(6) 阿弥陀三尊来迎図(7) 涅槃図は、人々の浄土への信仰を示すものです。阿弥陀三尊来迎図は法蓮佐保田村の念仏講が所持したものです。釈迦入滅を描いた涅槃図も念仏講の所持で、葬式にも使用したと考えられる大型の掛図です。奈良町の周辺では、寺とは別に盆や彼岸などに、町村内各家を独特の節回しで念仏を唱えてまわる六斎念仏がありました。こうした念仏系の講集団は、奈良町周辺では近世初期には町村に多くの参加者(結縁者)がありました。油阪町の「六西(斎)御念仏講帳」(寛文年間ほか1点)は、結縁した約50の町村名と約140人の人名が記されていて、奈良町の念仏信仰の伝統と町や村を超えて地域全体が結縁した、近世初頭の念仏信仰の形態が窺える貴重な史料です。

### 3. 展示関連イベント

#### ① にぎわいの家出張展示「タイムトラベル奈良町～神仏への祈り～」

「神仏への祈り」展開催に合わせ、展示開催を多くの人に知ってもらうために、奈良町にぎわいの家において、展示に関連した史料の一部を出張展示し、あわせて史料保存館員による史料解説を行います。

日時 9月12日(土) 午後2時～4時  
(館員による展示解説は午後2時から30分程度)

会場 奈良市中新屋町5 奈良町にぎわいの家

費用 無料

申込 不要 会場でのマスク着用・検温・連絡先提供のご協力をお願いします。

※新型コロナウイルス感染症予防のため、予定を変更する場合があります。

#### 4. 告知方法 市ホームページ・twitter・関西文化.com・しみんだより9月号・チラシ配布・報道機関及び歴史街道推進協議会への情報提供、周辺施設への広報

### 展示予定史料

#### (1) 地藏菩薩立像

#### ① 地藏菩薩立像(江戸時代・紙本着色) 肘塚柵町自治会 寄託史料



肘塚柵町地藏講でお祭りしていた地藏菩薩立像です。

描かれている地藏菩薩は、左手に願いを叶える宝珠を持ち、右手には修行に歩く僧の持物である錫杖を執り、蓮華座の上に立つ姿で台座の周りには来迎雲が描かれています。

地藏菩薩は、釈迦如来が入滅後に弥勒如来がこの世に現れるまでの間、あらゆる生き物の救済にあたりとされています。地藏尊を信じれば様々な利益が得られ、病苦などからも免れ、さらに死後地獄に堕ちてもかならず救われるというものです。また、奈良町では、春日信仰と浄土信仰が結びつき、人々の間で地藏信仰が盛んになっていったようです。

肘塚柵町では、厨子に納められた地藏菩薩立像を信者の家が一年交代で祭る「廻り地藏」とよばれる独特の風習を行う地藏講がありました。地藏盆の縁日には、町の会所に集まって幕を張り、提灯を掲げるなどしてのお祭りを平成28年(2016)まで行っていました。

## (2) 春日宮曼荼羅

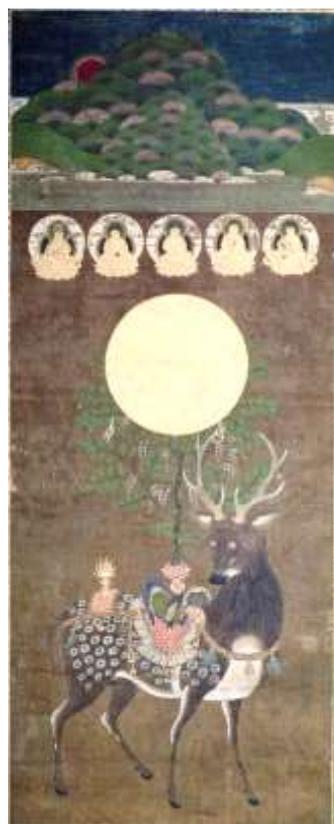
### ② 春日宮曼荼羅（江戸時代・紙本着色） 瓦町旧蔵史料



春日曼荼羅は、春日大神すなわち春日信仰を具体的にあらわしたもので、①春日野と春日社殿、および春日山を描いた春日宮曼荼羅、②興福寺の伽藍と春日大社社殿、それに春日山とを描いた春日社寺曼荼羅、③白鹿の背に櫛をたて、鏡あるいは春日大神と春日山を描いた鹿曼荼羅、④武甕槌命が鹿島から奈良へ勧請された際、白鹿に乗って来られたという伝来を具体化された鹿島立神影図（白鹿に武甕槌命が乗る姿絵）、⑤五社の本地仏（釈迦如来・薬師如来、地蔵菩薩、十一面観音、文殊菩薩）を描いた春日本地仏曼荼羅などがあります。奈良町などの春日講で本尊としてまつられているのは、主に①春日宮曼荼羅と③春日鹿曼荼羅で、この中でも春日鹿曼荼羅が一番多く見うけられます。このほか天照大神、春日大明神、八幡大菩薩と墨書された三社託宣と呼ばれる掛け軸や単に金幣を本尊としているところもあります。

奈良町では、江戸時代から町内の拠点として会所があり、そこでは諸神仏がまつられて様々な講が組織されてきました。その中でも春日講は奈良町で最も代表的なものです。春日講は、室町時代には興福寺や春日社でさかんに行われていたものが江戸時代までに奈良町をはじめ各地に広がったものと考えられます。春日講が行われる際に、祭壇に掛けられたのが春日宮曼荼羅や春日鹿曼荼羅です。これらの講は宗教的な儀礼を保ちつつ、談話と共同飲食の場となり、地域の一体感を高める上で大きな役割を果たしました。

※参考資料（写真）  
春日鹿曼荼羅（江戸時代）  
北京終町春日講所蔵



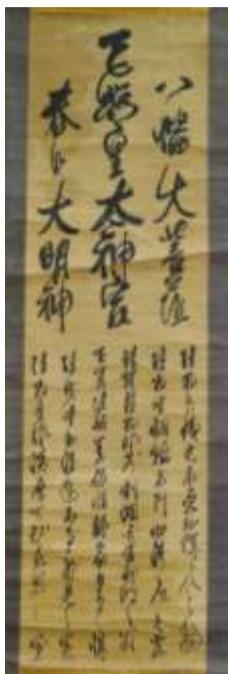
### ③ 春日講文書 江戸～大正時代（浄言寺町旧蔵史料）



浄言寺町春日講の月掛帳や算用帳です。

### (3) 三社託宣

#### ④ 三社託宣 (江戸時代・紙本着色) 法蓮佐保田町念仏講 寄託史料



天照大神・春日大明神・  
八幡大菩薩、三社神号とそ  
れぞれの託宣が書かれてい  
ます。天照大神の神託は「謀  
計雖為眼前利潤、必当神明  
罰、正直雖非一旦依怙、終  
蒙月憐」（謀計は眼前の利潤  
たりと雖も、必ず神明の罰に  
当たる、正直は一旦の依怙に  
非ずと雖も、終には月日の憐  
れみを蒙る）とあり、正直、  
清浄、慈悲などを誓約した  
ものです。

#### ⑤ 三社託宣図 (江戸時代・紙本着色) 瓦町旧蔵史料



瓦町の信仰行事で祭られていた三社託宣の絵像です。この三社託宣図は示現した三神の姿が描かれており、中央が天照大神、向かって左が春日大明神、そして向かって右が八幡大菩薩を描いたものです。

天照大神は、童子形の姿（雨宝童子）で、頭上に五輪塔を頂き、唐装の服を着し、左手に宝珠を捧げ、右手で金剛宝棒を支えて立っています。春日大明神は赤童子の姿で、八幡大菩薩は僧形の姿で描かれています。

### (4) 月輪図

#### ⑥ 月輪図 (江戸～明治時代 紙本着色) 法蓮不退寺日待講 寄託史料



日待（ひまち）とは、人々があらかじめ定めた宿（やど）に集まり、前の夜から忌み籠りをしながら日の出を待つ行事です。この絵は、雨宝童子（版本）の絵とともに、日待講の木箱に在中していましたが、どのように祭っていたのかはわかっていません。真言密教の観想法である阿字月輪観を行う際に用いる図と似ています。

## (5) 富士浅間菩薩名号

⑦三社託宣図 ⑧不動明王像 ⑨富士大菩薩名号 ⑩役行者像 ⑪理源大師像

(江戸時代・紙本着色) 瓦町旧蔵史料



山上講および富士講で使われていた祭壇に祭られる尊像や名号の軸です。右から三社託宣、不動明王像、富士浅間大菩薩、役行者像、理源大師像となっています。

中央に掛けられる富士浅間大菩薩の名号には、八海修行の場所などが記されています。

理源大師聖宝（832～909）は、南都で三論・華嚴・唯識を学び、東大寺戒壇で具足戒を受け、また空海の実弟真雅より真言密教を学んだ修験道当山派の祖で、醍醐寺の開祖でもありました。理源大師が大峰山の大蛇を退治する際、奈良町の餅飯殿町の町民が手助けしたという伝承もあります。

## (6) 阿弥陀三尊来迎図

⑫阿弥陀三尊来迎図（室町時代・絹本着色）法蓮佐保田町念仏講 寄託史料



阿弥陀三尊来迎図は、阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩が雲に乗って西方浄土から臨終の信者を迎えに来る様を描いたものです。阿弥陀如来は、来迎印を結んで光明を放射状に放っており、観音菩薩は両手に蓮台を持し、勢至菩薩は合掌してそれぞれ前かがみの姿勢をとっています。三尊はいずれも白雲に乗り踏割蓮華座の上に立って、往生者のもとへ迎えに行こうとしている姿です。

この図は、阿弥陀如来の肉身は金泥で描かれ、衣文は切金で縁取され、金泥で雷文、斜格子文、植物文などの細かな文様が美しく描かれています。観音・勢至の宝冠・蓮台などは箔押しの上に、墨でかきおこしています。室町時代の作と考えられます。

## (7) 涅槃図

### ⑬涅槃図（江戸時代・紙本着色）法蓮佐保田町念仏講 寄託史料



涅槃図は、釈迦の入滅を描いた絵で、日本でも奈良時代から作られています。そして、毎年旧暦の2月15日に行われる涅槃会の本尊として宗派を問わずに祭られました。涅槃図は、沙羅双樹の間の寝台に横たわる釈迦のまわりに、多くの菩薩をはじめ俗人、さらに動物や虫までもが集まって悲しむ様子が描かれています。

この涅槃図の裏面には、「天和四年（1684）二月十五日 涅槃像開眼供養」の墨書があります。